



親しみやすい笑顔に、信念を感じさせる。一人ひとりに寄り添うマインドと、鋭い分析力を生かし、日本再生への処方箋を発信し続けている。

# 竹谷とし子

## ●難民に思いはせ

海のすぐ向こう側に、北方領土・国後島が見える北の街、北海道東部の標津町で生まれ育った。兄4人、姉1人の6人兄弟の末っ子。人口は当時で6000人ほど。海と山に囲まれ、日本有数の鮭の産地としても知られる町で、両親は水産加工業を営んでいた。

「気取らない優しい人たちと大自然に囲まれ、のびのびと育ちました。一方で幼心に、商売の大変さを両親の背中から感じていました」

小中学校時代のあだ名は「とっこ」。中学校では生徒会長を務める一方、漫画家やファッションデザイナーになることを夢見る普通の少女だった。この時の友人たちとの付き合いは現在も続いている。「今度、小学校時代の先生の退職祝いの会を行います。公務の都合がつけば、何とか行きたいのですが」と笑顔を見せる。

この時期、飢餓に苦しむ難民の子供たちの事態も考えられる。その解決策の大きな柱のひとつだと考えるからだ。

「再エネ、省エネの普及は、国外に流出している資金を国内に還流させて、地域に新しい産業と雇用を生み出すことにつながる。エネルギー問題の解決には時間がかかるので、今から始めないと間に合わない」と期待を寄せる。

標津町の隣、別海町では来年2月までに、

のドキュメンタリー番組をテレビで見たことが、その後の生き方に大きな影響を与えた。

「食べるものがない世界は、当時の私には想像もできないほど、ショッキングでした。『この子達のために、何ができるだろう』。『人を助ける仕事をしたい』。そんな思いが心の底からわき起こりました。これが政治家を志す原点です」

高校は、東京の高校に進学した。「将来への可能性を広げてあげたい」との両親の思いからだ。寮では多くの友人に恵まれ、寂しさは全く感じなかった。一方、飢餓の問題を調べるうちに、政治や経済を変えなければ世の中は変わらないことが、少しずつ分かり始めた。

大学に進学後、公認会計士を目指し、1日10時間の猛勉強を始めた。3年生での初挑戦は不合格だったが、翌年、創価大の女子学生で初となる、現役合格を達成した。卒業後は、監査法人での勤務を経て、経営コンサルタントとして、会計の専門知識

牛の糞尿を使った日本最大のバイオガス発電が稼働し、メンテナンスや運搬など、多くの雇用が新たに生まれる。牛の数が人口よりも多いという町の特性を生かした発電形式だ。

「地域の特性と日本の技術力を生かせれば、再エネは地域活性化に直結する。そのためにも、どの分野に集中的に取り組めば効果があるか、方向性を示したい」

を生かしながら企業の経営改善に携わった。また、幼いころからの夢だった、発展途上国の支援プロジェクトにもかわり、ODAを使った電力や鉄道セクターを導入する仕事も手掛けた。

## ●再エネ普及に尽力

「日本の現状を見過ごせない」との思いから、2010年、参院選に出馬し、初当選を果たした。女性も若者も、高齢者も、誰もがいきいきと希望をもって暮らせる社会の実現を、目標に掲げている。特に、会計士、経営コンサルの経験を生かして、会計制度を変えて「財政の見える化」を進め、税の無駄遣いをなくす政策に力を入れている。

また、党女性局平和・環境PT座長として、再生可能エネルギー、省エネを推進している。火力発電は燃料費による莫大な国富流出に加え、地球規模で考えればCO<sub>2</sub>による地球温暖化問題があり、また途上国の発展を考えれば、将来的な化石燃料不足

一方で、電力会社が悪者になるような風潮に異を唱える。「原発事故は許せないが、電力会社で働く現場の人たちは、台風など大規模な自然災害の際の迅速な復旧作業など、日々、命がけで電力の安定供給を支えている」と現場にも思いをはせる。

「政治も経済も、人が行うこと。対話によって、人の力を結びつけ、新しい政治の道を切り開きたい」

## 「対話」で人の力を結び付けたい



profile 公明党 参議院議員  
1969年生まれ。92年創価大経済学部卒。公認会計士。監査法人トーマツを経て、96年からアビームコンサルティングで経営コンサルタントを務める。10年参院初当選。党女性委員会平和・環境PT座長として、再生可能エネルギー、省エネを推進。党行政改革推進本部公認会計委員長。現在1期目